

bunka@nagasaki-np.co.jp

# 開港後の1859年来崎

長崎居留地

ドキュメント

ブライアン・パークガフニ

33

## オルトの来日時期

長崎市は昭和54(1979)年に「重要文化財旧オルト住宅修理工事報告書」を発行した。同報告書の最後には、英国人商人ウィリアム・オルトを紹介する3ページの文章が付け加えられているが、オルトというより、日本茶輸出の先駆者として知られる大浦慶に焦点を絞っている。

当時、長崎居留地における外国人商人の生活や活動に関する研究はほとんど行われておらず、オルトに言

及する部分では、かえって誤解を深めているだけである。一つは、彼がいつ来日したかという問題である。

亡くなる前に病床に伏していた大浦慶は「長崎港製茶輸出経路概略」と題した上書を長崎県令に提出している。その中で、オルトが安政3(1856)年夏に日本茶を買うために来崎

し、「直ちに巨額の注文をなせり」と記している。この記述は、上記の報告書や大浦慶の伝記などで何度も



若き日のウィリアム・オルト(筆者蔵)



明治期の絵葉書には、出荷のための茶の梱包の様子が描かれており、長崎の消印が押されている(筆者蔵)

## 大浦慶は記憶違い?

繰り返す語られ、定説として広く認知されている。しかし、関連の研究は進んでおり、オルトが英国を離れた13歳から24歳まで母親などに送った70通以上の

My dearest Mother  
Another change in my life of living has taken place and I am now a merchant, being independent and dependent alone upon my own exertions for a livelihood. I really regret to have told you that I had left the East India House at Shanghai, but I have done so and am now settled here in Japan, among our tea. The fact of the case are these having nothing to do with Shanghai, and being able to live on, I tell you that my journey is a great deal better than the Captain's for this part. Finding this a most splendid country, I am now going for a summer, going, please, to my mother, I determined to tell her as I returned to Shanghai, and she was very glad for me to stay myself here as a commission merchant and to be near my mother. I am now of course a fortune in earnest. I received from the East India House the best of the finest goods for sale. I am now of course a fortune in earnest. I received from the East India House the best of the finest goods for sale. I am now of course a fortune in earnest. I received from the East India House the best of the finest goods for sale.

オルトが長崎から送った最初の手紙(部分)。安政7(1860)年2月3日付。「僕は今、商人になった」と母に告げて近況を詳しく伝えているが、茶のことは言及していない(長崎歴史文化博物館蔵)

手紙が、最近、オルトの子孫から長崎歴史文化博物館に寄贈されている。これらの手紙によると、彼は安政3(1856)年当時16歳にして、帆船のシヤロット・ジェーン号にて船員見習いとして修業していた。同時期の手紙には「日本」や「長崎」の地名も茶の話もどこにも見当たらない。なお、オルトが開港後の安政6(1859)年10月に来崎したことは、手紙の他に長崎英国領事館の資料にも明記されている。

ちなみに、上申書に示した取引の時期は大浦慶の記憶違いか、あるいは聞き取り調査を行った県職員の見誤りのいずれかによるものであることは明らかである。安政6(1859)年夏に着任したジョージ・モリソン英国領事は、同年前半に長崎から輸出された品物

の一覧表を英国政府に提出しているが、その中で茶の記載がないことが注目値する。この事実から、開港の年には日本茶の輸出がまだ本格的に始まっていなかったことがわかる。

一覧表に登場しないほど微少だった茶の輸出は程なくして激増。その様子も英国領事館資料の中で確認できる。万延元(1860)年の貿易に関する報告書では、モリソン領事は次のように述べている。

「茶は長崎からの主な輸出品になる可能性が高い。品質と輸出適性に対するわれわれの期待はまったく誇張されておらず、日本人はその精製と梱包を学んでいる。(中略)この商品の輸出がますます重要になると考える十分な根拠がある」

ウィリアム・オルトは、文久2(1862)年から大浦地区の裏通りに大きな製茶工場を運営しているが、彼が茶葉の「巨額の注文」をしたのはまさにこの時である。大浦慶は長崎近郊からの茶葉の輸送事業において重要な役割を果たしたようだが、初期の海外への輸出に関する経緯は、依然として不明な点が多い。1次史料の掘り起こしと今後の研究成果を期待するのである。

(グラバー園名誉園長)

月1回掲載します